

女性のアルコール依存症について

独立行政法人国立病院機構久里浜アルコール症センター 木村 充

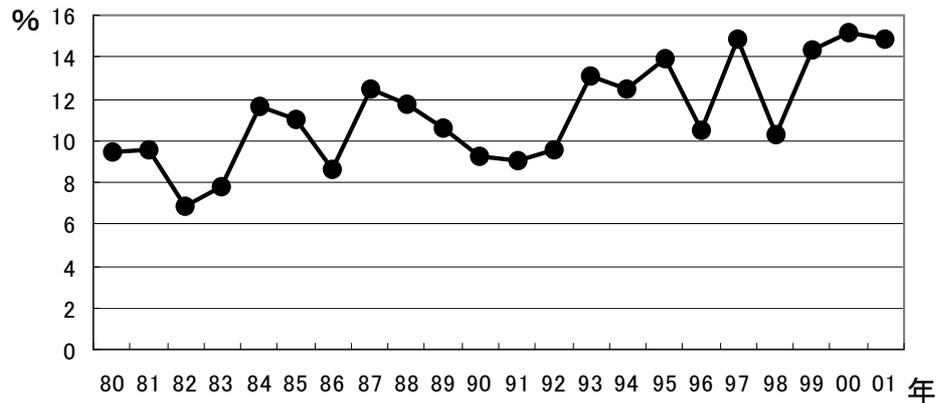
I 女性アルコール依存症の患者数の動向

女性のアルコール依存症患者は、近年増加していると言われている。アルコール依存症全体では、女性より男性の患者の数が圧倒的に多いため、女性のアルコール依存症に関しての研究はあまり数が多いとはいえず、科学的な知見が十分に蓄積されているとはいえないのが現状である。

しかし、飲酒週間の変化によって、今後、女性のアルコール問題が増加することが予想される。平成11年の国民栄養調査では、1合以上を週3回以上飲酒する習慣飲酒者は30～50歳代の女性で10～12%であり（男性は50～65%）男性より少ないが、30歳代が多く、男性より若年側にシフトしている。同じ調査で1990年から1999年の期間に女性習慣飲酒者が年々増加しているなど女性の飲酒は拡大しており、特に若年者で顕著である。また、国立療養所久里浜病院の初診アルコール依存症患者数をみると、男性が横ばいなのに対し、女性では年々増加しており、初診患者の女性割合は、1990年で約10%であったものが、2000年には約15%にまで増加している（図）。このような動向から、今後も女性のアルコール依存症患者は増加することが予想される。

II 女性のアルコール
依存症の特徴

女性では、男性に比べてアルコール依存症が発症するまでの期間が短いといわれている。飲酒が習慣化してからアルコール依存症発症までの期間は、男性では一般に10～20年以上とされているが、女性は6～9年とされており、そのため女性は発症年齢も低い。



図：久里浜アルコール症センター外来初診患者の女性割合

また、同じ量の飲酒でも、女性は男性に比べて臓器障害が深刻になりやすい。肝障害、肝硬変の危険が高まるアルコールの量は、男性のおよそ分量である。中枢神経系でも、女性の脆弱性が予想されている。女性特有の疾患として、アルコール摂取により、乳癌の危険が高まることも報告されている。また、アルコール摂取により、女性ホルモンの分泌が抑制され、不妊、月経不順などが起こりやすくなるといわれている。女性の場合、妊娠中のアルコール摂取による胎児への影響も大きな問題である。

女性アルコール依存症の環境的な要因として、幼小児期の虐待や無視の影響が、アルコール依存症の発症と関連があると考えられている。また、女性アルコール依存症患者は、他者からの暴力被害を受けやすいことも知られている。特に夫からの暴力が多いとされ、久里浜アルコール症センターの女性患者も同様の傾向があった。他にも、女性飲酒者は自動車事故をはじめとした致命的な事故を起こしやすいとされている。

女性アルコール依存症は、家庭内葛藤やその他の生活危機などを契機として反応性に生じることが多く、病前性格の精神病理性が高いとみられている。特に 20 代までの若い女性アルコール依存症患者では、摂食障害の合併が高率に見られ、29 歳以下の女性アルコール依存症者の約 70%が摂食障害を合併したという報告もある。他にも、境界性人格障害、パニック障害、気分障害などの合併が多く認められる。パニック障害などによる不安から、安定剤代わりに飲酒を始めて、アルコール依存症に至る例も多い。

Ⅲ 女性アルコール依存症の治療

女性の場合、男性と比べ、逸脱した飲み方に対して世間的な批判が多いと思われる。そのため、男性と比べると女性はアルコール問題を隠したい傾向が強い傾向がある。また女性の場合、問題は家の中で生じることが多く、男性に比べ問題の発見が遅れることが多い。一方で、アルコール依存症治療中の女性では、男性よりも早期に精神科での治療を開始しているという報告もある。アルコール問題を有する女性は性的虐待やその他の暴力を受けやすいため、より早期の治療が必要と考えられる。

依存症の治療に関しては、わが国では、女性の場合も男性と同じく、集団精神療法的内容を主体としたアルコール依存症リハビリテーションプログラム（ARP）が中心となっている。AA や断酒会にも通じる患者相互の共感を利用して、回復意欲を高めるなどの集団力動を重要視している。しかし、女性では異質なタイプが混じり合い、境界性人格障害に代表されるような協調性、社会性に欠けるケースも多く、男性に比べて集団治療が困難である。また、異性の目を意識することもあり、男性と同じグループで治療を行うことは問題点もある。久里浜アルコール症センターでは、女性だけのグループで治療を行っており、女性のみでのミーティングや作業療法を行っている。男性よりも個人療法を重視した治療構造が望ましいと考えられる。

男性アルコール依存症では職場のしめる役割が大きいのに対し、女性アルコール依存症の治療では家族の役割が非常に重要である。特に夫が、アルコール依存症が病気であることへの理解が乏しく、治療に協力的でないことが多く、家族に対する教育も重要となる。また、夫や両親に暴力やアルコール問題が存在することも多く、社会的な介入が治療上必要となることも多い。

女性アルコール依存症の予後については一定の見解は得られていない。かつては予後良好群が少ない、死亡率が高いなど、予後は男性より不良と考えられていたが、女性専門病棟治療後の患者調査では高い断酒率を得られたとするものも複数あり、予後についてははっきりした見解は得られていない。こうした点からも女性に適した治療プログラムの供給が必要であるといえる。